

視野を広げる造形活動 2016

佐藤 有紀

SATO Yuki

本稿は毎年夙川学院短期大学で実施されている教員免許状更新講習で開講している『視野を広げる造形活動』の実践報告である。この講習のタイトルは子どもたちの自由な表現活動を支えるためには保育者・教育者自らが子どもたちの幅広い思いや表現意欲を受け止めることのできる広い視野を持たなければならないと考え設定しているものである。対象は現職の保育者・教育者であることから、この講習は大学教員側の立場からは現在の保育・教育の現場の造形指導に関する傾向や問題点を知ることのできる貴重な機会となっている。本論では活動の実践内容と受講者の感想から、今後の保育教育における造形活動についての問題点や指導のあり方について考察した。

キーワード： 造形活動 教員免許状更新講習 平面技法 表現 環境

1. はじめに

夙川学院短期大学では平成21年(2009年)から免許状更新講習を行っており、筆者はこの講習を担当してから今年度(2016年)で8回目になる。

この教員免許状更新講習の目的は『教員として必要な資質能力が保持されるよう、定期的に最新の知識技能を身に付けることで教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊厳と信頼を得ることを目指すもの』とされている。

筆者が担当している造形の分野の講習では、その目的に沿うように平成22年(2010年)からは『視野を広げる造形活動』というテーマを設定し、現職の保育士、小学校、幼稚園教諭が目の前の子どもたちに寄り添いながら楽しく表現活動を行うためのきっかけとなるような内容を企画している。講習を行い毎回受講者の意見を聞くことにより、この講習が大学側から一方的に知識技能を教授する場ではなく保育士養成校教員である筆者にとっても保育、教育の現状を知り、学ぶことのできる貴重な場であることを実感している。

本稿は平成28年(2016年)の教員免許状講習『視野を広げる造形活動：午後の部』の実践報告である。

この講習の内容と受講者の感想から現在の造形指の問題点、また保育・教育の現場で子どもたちと造形活動を行うにあたり本当に必要な視点を改めて考察する。

2. 事前アンケートとその結果

この『視野を広げる造形活動』は選択領域の講座である。午前の部、午後の部に分かれており、筆者は午後の部(13:20~16:50)を担当した。開講日は平成28年8月27日、28日、29日で、受講者数は合計83名であった。この講座を行う前にこの講座『視野を広げる造形活動』で期待をする内容についてのアンケート調査を行った。その回答は以下のようなものである。

- ・幼児が楽しく造形活動ができる指導方法や遊びが知りたい。
- ・新しいアイデアがほしい・様々な技法を知りたい
- ・絵画指導も教えてほしい。毎年の造形展が悩みです
- ・おちついて遊ぶことのできる遊具の代わりとなるような造形活動が知りたい。
- ・子どもの集中力の途切れない活動が知りたい。
- ・子どもたちに対する有効な言葉がけを知りたい。
- ・子どもたちの自由な発想を引き出せる表現活動を学びたい。
- ・豊かなイメージをはぐくめるような教育のあり方について知りたい。

また、

・自分には自信のない分野であり基本からしっかり学びたい。

というように、造形の分野に苦手意識をもっているため、それを克服し子どもにとっても楽しい造形活動が知りたい、という意見もあった。

3. 実技講習

3.1 「視野を広げる造形活動：午後の部」の概要

事前のアンケート調査の結果をうけて筆者が担当している「視野を広げる造形活動：午後の部」では以下のような講習内容を実施した。

教員免許更新講習 「視野を広げる造形活動」

午後の部

時間：13：20～16：50

場所：図工教室 1テーブルに4人掛け

材料：教材用クレパス、水彩絵の具、油（食用）画用紙

道具：筆、割りばし、スポンジ、ハサミ、カッターナイフ、マスキングテープ、ボンド

1. はじめに

今回の講習の造形活動について

2. 製作Ⅰ. 基本的な描画素材を再体験する

① クレパス

- (塗る) ・転写あそび
- (こする) ・ステンシルあそび
- (伸ばす) ・混色

② 水彩絵の具

- (偶然性を楽しむ) ・デカルコマニー
- ・スタンピング
- (はじきの効果) ・油との混合

3. 製作Ⅱ. 立版古製作（平面から立体へ）

① 立版古とは

② 立版古製作

偶然できたイメージを立ち上げ発展させる。
新たな視点で描画をみる。

4. 鑑賞

今回の活動は保育・教育の現場でもよく使用する素材を用いた描画活動とその活動で作った平面作品を用いて、立体作品の製作に展開していく内容である。こ

の活動は保育者・教育者である受講者自身が子どもの視点に立ち返って行い、その活動を発展させて自分自身にとって新たな視点を開く試みである。そのためにはまず今回の講習の活動を行う上で留意する点として

- ・「活動中、他人の視線や作品の出来具合のことは気にせず、自分の作業に集中すること。」
 - ・「ありふれた画材をもう一度初心に帰って素材そのものの感触を味わいながら使ってみること。」
 - ・「作品の仕上がりではなく作業の行為そのものに意識を集中して作品を作ること。」
- などを挙げた。

3.2 製作Ⅰ. 様々な平面技法

～基本的な描画素材を再体験する～

基本的な描画素材を用いて画材そのものの特質を味わいながら様々な平面技法による表現あそびを行う。そしていくつかの平面技法を体験しながら複数の作品をつくる。

この作業を行う前に、現代美術の抽象表現主義の主要なアーティストであるジャクソンポロックの作品を図録で紹介した。



ジャクソンポロック「オータム・リズム no. 30」(部分) エナメル、キャンバス 266.7×525.8 cm 1950

この作品の解説によると、「この作品は、ポロックのドリッピングペインティングの中で最も有名な作品で、そののみ外れた大きさと果てしないエネルギーは観るものを渦としぶきの複雑な網の目の中へと誘い込む（中略）ポロックの抽象絵画からは焦点や枠をはじめとする伝統的な画面構成の概念が取り払われている。」とある。

ポロックはこの作品を現代美術作家としての自覚をもって描いており、子どもの描く絵とは別の次元のものである。子どものなぐりがきのような自然発生的な表現であるが、そこには作為がある。しかし作家がこのような制作をする時は子どもが自らの意思で絵を描くときと同じようにその画材の質感や、どんなふうに変化するかということに集中して無心で作品と向かいあっているであろう。

描く行為そのものに喜びや楽しさを感じている子どもの描画からはこのような美術作品のように新鮮な美しさや躍動感が現れる。この「製作Ⅰ」ではまずその描画そのものの楽しさを改めて体験し、画材の特質を味わうことを目標とした活動を行う。

「製作Ⅰ」では保育の現場でもよく使用されるクレパスと水彩絵の具を使用した。これらの画材による様々な技法でできた線や形を重ねて数枚の平面作品を描く。

① クレパスによる平面技法

- 「塗り」技法：8つ切り画用紙を更に半分にしたサイズのを好きな色で隙間なく濃く塗り、カラフルな色面を作る。その画用紙を用いて、型うつしをしたり、指で伸ばして、色を広げたりして、別の画面に様々な模様を描いたり色々の太さの線をひいて遊ぶ。その際、具体的なものは描かず、偶然生まれる色面や線を楽しみながら画用紙の白い画面に跡をつけてゆく。
- 「伸ばす」技法：別の画用紙にクレパス線を油で溶かしながら指で伸ばす、またはスポンジで伸ばす。という作業で、画用紙に様々な効果を試してみる。

クレパスとはクレヨンの伸びをよくした画材で大学の造形授業で学生もよく使用するが、色鉛筆を扱うように、同方向ななめにうっすらと、しかしムラがある塗り方する傾向があり、描線に力がないこと、線質が一定で使いこなせていない傾向があり、画材に対する興味の希薄さが気になっている。

ここでは、クレパス素材にしっかりと触れ、その線質の変化、違う物質と混ざりあうことによる効果の変化、を体験することを目的とした。

② 水彩絵具を使った平面技法

別の八つ切り画用紙にデカルコマニーやスタンプ技法をもちいて、偶然性を楽しみながらカラフルな画面をつくってゆく。また、あえて筆は用いず、スポンジを使って、水彩絵の具に油（食用）を混ぜて描

画する方法を紹介した。



最初は、これらの技法を使って自由に画材をのせたり描いたりしていくことに抵抗を感じている受講者もみられたが、作業が進むにつれどんどん、素材そのものに集中して画面をつくっていく様子が見られた。その結果、講習Ⅰの終了時にはカラフルで様々な表現の平面作品が沢山出来上がった。

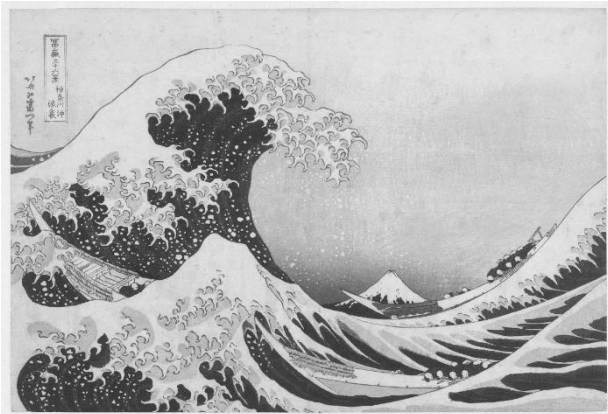


3.3 製作Ⅱ. 立版古製作（平面から立体へ）

～平面素材を用いた絵画作品の展開～

線や面を重ねるとそれだけで画面に奥行きができる。「製作Ⅱ」ではその奥行きのある平面にさらに手を加えて奥行きのある「立版古」風の立体空間製作を行った。

この「立版古」とは江戸時代に流行したおもちゃ絵であり、一枚の紙に様々な部品が印刷されているものを切り抜いて、切り抜いた絵を組み立てて舞台のような模型をつくるものである。ここでは浮世絵で有名な葛飾北斎『神奈川沖波裏』の版画を立版古にしたものを紹介し立版古について説明を行った。



参考作品：葛飾北斎 木版画『神奈川沖波裏』



参考作品：ペーパークラフト立版古シリーズ北斎「神奈川沖波裏」集文社（筆者組み立て）1250×89×90mm

日本人の絵画空間に対するイメージは浮世絵にあるように、線遠近法という方法で表現された三次元の絵画表現になじみが深い。これは古来より壁に絵を直接描いていた西洋人とは違い、日本人は水平な画面に絵を描き、立体の奥行きを表す際その絵をたてて配置し空間を作っていく感覚があるからといわれている。浮世絵の版画や歌舞伎の書き割りや大道具が生み出した世界観もこれによるとされている。

「製作Ⅱ」ではこの立版古の仕組みを利用して「Ⅰ」で作った平面を立てて配置し、奥行きのある立体画面を作り、平面作品を違う視点でながめてみる。また、不思議な立体空間を作ってみる。という提案をした。

まず、製作Ⅰで作成した平面作品の中の形や線を切り抜いて見立てあそびの要領で様々なイメージの形を自由につくる。一度描いた画面にハサミを入れ、違う方向から見たり組み合わせたりすることによって、新しいイメージが生まれたり、具体的なものに見えたり

する。そしてできたものを組み合わせたり並べたりして別の画用紙で作った箱状の空間の中に立てて配置し、立版古のように箱の中を舞台のようにして独自の空間をつくり上げていく。



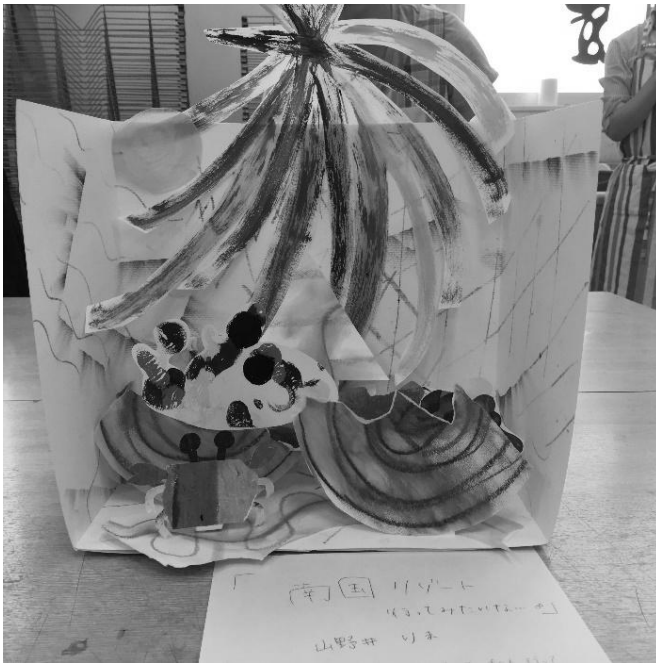
「平面作品を切り取る」



「組み立てる」

この「製作Ⅱ」では、無作為に作ったものに作為を加え、作品を作り上げるものとした。「難しい」という声も聞こえてきたが、作業が進むにつれて、それぞれの創作に没頭していく様子がみられた。

立版古の土台となる箱状のものは「製作Ⅰ」で描いた画用紙で作られ、サイズは統一していたが、制作が進むにつれてどんどんイメージが枠からはみ出るダイナミックな表現も現れた。



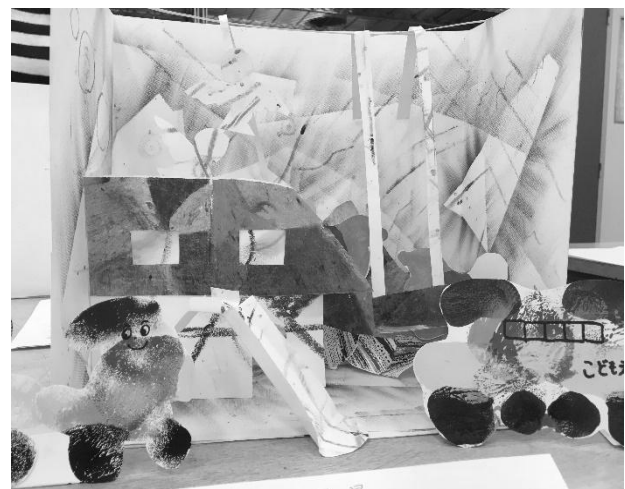
- 平面素材で作った立版古の完成作品は
- ・具体的な形が配置されて物語になっている作品
 - ・情景・風景を表したもの
 - ・抽象的なイメージが自由に配置された空間
 - ・趣向をこらして複雑な視覚効果をねらったもの
- など、様々な作品が出来上がった。



「海のイメージ」



「物語のイメージ」



「幼稚園のイメージ」

3.4 鑑賞会について

鑑賞会はテーブルの上をギャラリースペースにして作品とその横に作品についてコメントを書く用紙を設

置した。受講者は鉛筆一本もち、それぞれが他の受講者の作品の横に置かれてあるコメント用紙に感想を書くという方法で行った。鑑賞の時間は30分取っているためほぼ全ての作品をお互いに観ることができ、用紙は沢山のコメントで埋まった。



3.5 講習の振り返り

講習後に以下の質問で受講生からの意見・感想を聞いた。

「今回は、造形活動についての固定的な概念や方法論に縛られることなく、目の前の子どもたちに寄り添いながら楽しく表現活動を行うために少しでも視野を広げていただけのきっかけになればと講習内容を企画いたしました。本日の免許更新講習を受験して、特に貴方が「視野が広がった」と感じるのはどのような面においてでしょうか？」

受講者回答（抜粋）

- クレパス、絵具、様々な画材に触れ、作品を作ることによって私自身忘れていた「画材を使っているんなことが楽しめる！」ということに気づかされました。現代の子どもたちはメディアに囲まれて育っているので、画材によって使い分けること、一つの画材でも細い線太い線、また楽しい様々な技法に触れることがなくなってきています。ただ作品を完成させることだけが造形活動ではなくその作りだす途中、色々な工夫を重ね失敗したりうまくできたりを繰り返しながら自分の作品を作っていく、それこそが造形活動の一番大切なことだと感じました。
- 沢山の技法を教えていただきました。保育の現場でも技法は使いますが何に使うかという使い道をわかった上でその物のために技法を取り入れて模様などのために使っ

ていました。今日は何に使うかはわからないまま素直に線を描き、技法そのものを楽しむことができました。これこそ決まりきったものではなく自由な発想で作ることが「視野の広がり」がありました。

- はじめにクレパスで自由に塗っていく技法は普段子どもたちと一緒に塗っているものの、自分で塗るとこれだけ夢中になるのかといつもと違う感じ方をしました。その他の技法どれもが子どもたちの驚きや興味が目に浮かぶくらい楽しむことができそれだけでも視野が広がりました。また色々な技法を自由に描いている偶然性を利用してまた画材の特質を活かして平面素材から発展した造形活動として立体へと作っていく面白さを体験していくことにより感じることができました。偶然できたイメージを発展させていくことは難しかったけど、「こんな風にみえるかな、こんな風に作ってみよう」と思うことで自分の視野はどんどん広がったように思います。
- 普段は子どもの絵をみると「この線は勢いがある」「この子は頭足人間」「足の関節がでてきた」など発達面を見ていることが多いのですが、今日は子どものころの心にたち帰り取組みました。そして気づいたのはやはり「発想力」「想像力」「イメージする力」そしてそれを「形にする力」が大切だということです。造形活動は心の中の吐き出す表現であり、言葉にならない感情を吐き出して形作り自分の人となりを確かめる活動のように感じました。
- 自分の作品を他の方に見て頂きました、他の方の作品も見る事ができて様々な表現の仕方があってとても驚きました。自分にはない考えを知ることができるのも「視野を広げる」きっかけになりました。沢山感想が書いてあり嬉しかったです。どんな作品であれ「認めてもらう」ことで自信になり次の作品への意欲につながると思います。
- 型にはまった考えで子どもに接するのではなく様々な考え方や方法を取り入れ、子どものような柔軟な考え方で造形活動をしていきたいと思いました。
- 子どもたちの画材への触れ合い親しみに関しては本当に薄くなってきていると思います。決められたカリキュラムの中では難しいこともあるかと思いますが幼少期には汚れを気にせず画材にしっかり触れ合える環境を作って

あげることが大事だなと思いました。自分自身がしっかり画材にふれて造形を楽しまないと子どもたちにも伝えることができないと思います。

- 私はついつい「絵を描かせないと」「上手にできた作品を残さない」と家に持って帰らせられない」と思っていました。子どもの表現を大切にしながらプレッシャーを与えて描かせてしまっていたので、まず上手に描かせようという思いを取り除き楽しんで取り組んでいきたいと思いました。
- 私自身製作は苦手が好きでない。これは子どもの頃から人の目が気になり失敗を恐れるところからきていると思っているが自分がそうであるからこそ子どもたちにはそういう苦手意識を持ってほしくないと思っている。今日の講義で今まで以上に自由に表現することの思いのままに表現することができる環境を作っていきたいと思えた。
- 日頃はテーマがあった上でそこに向けて仕上げていくという造形活動を行っていますが、今回は始めのうちは何も図形など考えずにただ線を描いていくだけの活動。その後できた素材を組み合わせて自分でテーマを決めて一つの作品を作り上げた点です。私自身保育者でありながら表現力が乏しく図工が苦手な方です。初めからテーマが決まっていた完成に向けて・・・となるとつい身構えてしまいます。完成というゴールの部分を示すだけでなくそこへの向かい方を教えていくこともまた大事ななと感じました。そういったきっかけをつくっていくことから少しずつでも造形活動に興味をもってもらえるそれがまた子どもたちの成長でもあるし私たち保育者の喜びにもつながっていくことと思います。私自身が苦手意識をもっている間はどうしても楽しさが伝わっていかないので自分自身も少しずつでも日ごろから造形活動に関わって意識改革をしていくことも今後の課題だなと感じました。

上記の回答は全受講者の回答の一部であるが、全体の感想をみても、この講習の目的が「実際の活動を改めて見直し感じ直すことによって作品のみかたの視野を広げること」であるという意図が伝わっており、多くの受講者は造形活動においては作品の完成よりもその過程が大切であるものと捉えていることが分かった。しかしそれぞれの現場の事情、環境や時間、カリキュラムなどによって様々な制限があり、望むような活動

をすることが難しい現実も見られる。

また互いの作品を鑑賞することによって様々な視点を得られたという感想も多くみられ、子どもの絵をみる時に大人の意見だけではなく、子ども同士で互いの作品について話しあいたいという意見もあった。

4. まとめ

2章のアンケートでは講座に対する要望として単に、新しい技法や保育あそびのネタが欲しいというような意見が多く見られた。しかし教育・保育要領に明記してあるように保育者がすべきこととは、単に知識、技術の伝授ではなく、子どもがあそびの中で自己表現をようとする気持ちを捉え必要な素材や用具を用意したり援助したりしながら、子どもの表現意欲を満足させ、表現する喜びを味あわせることである。また、「園児の場合、必ずしも、初めにはっきりとした必要性があって、かいたり、つくったりしているのではない。身近な素材に触れて、その心地よさに浸っていることも多い。やがて線がかけることや形が組み合わされて何かに見立て、遊びのイメージを持ち、それに沿ってかき加えたり、作り直したりする場合もある。」

とあり、今回の講習では受講者が子どもの気持ちに立ち返りその感覚を再体験できる造形活動を「視野を広げる」という目的で提案した。

その結果、その感想により、保育士・教員はその活動の楽しさを楽しみ子ども自らが発展させていくことの大切さを理解していながらも、日々の現場では結果重視の表現活動になりがちであることがわかった。その原因は造形活動のねらいが「表現」の領域のみに置かれているためではないだろうか。初めのアンケートで「子どもが楽しめる活動を教えて欲しい」という意見も多く見られたが、そのような活動をするためには領域「環境」の周囲様々な環境に好奇心や探究心を持つてかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養うというねらいを忘れてはならない。保育者があそびの中から生まれる子どもの表現をしっかりと受け止め、またその活動を広げてゆくということが造形の指導なのである。ここでは子どもに「～させる」というように、「表現活動を指示する」のではなく「表現活動が生まれる」、「動機」や『環境』を培うことが重要なのである。

5. 今後の課題

これから保育・教育に携わる学生にとっても、表現活動のねらいを深く理解することは大切なことである。それを経験・体得するためにどのような授業をつくってゆけばよいか。大学での造形活動のあり方を改めて考えていきたい。

参考文献・資料：

- ・『世界で一番美しい名画の解剖図鑑』監修 Karen Hosack Janes 寄稿・編集 Ian Chilvers /Ian Aczek 発行者 澤井聖一 発行所 株式会社エクスナレッジ 2013年
- ・『立版古 江戸・浪速 透視立体紙景色』伊奈輝三 株式会社 INAX 1993年
- ・『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』内閣府・文部科学省・厚生労働省 株式会社フレーベル館 2015年

ピアスーパーバイザーからのコメント

本論文は、本学で実施されている教員免許状更新講習で開講された『視野を広げる造形活動』の実践報告です。現場で働く保育者・教育者たちは、文中にもあるように日々の仕事に追われ、結果ありきになってしまっていることに気づきながらも、後戻りする間もなくカリキュラムをこなしています。この実践は、過程を大切に考えることをもう一度認識できるものであると感じました。特に、製作 I での画材の持ち味を生かし、何かを作り上げることを意識せず、自由に画材をのせたり描いたりしていく創作活動は、保育・教育での造形活動の基本を思い出させるものです。技法を学ぶことも必要ですが、このような活動をより多く経験し、保育者・教育者自身の視野を広げることが、子どもの自己表現を育むことにつながっていくと思います。

(担当：田中 麻紀子)